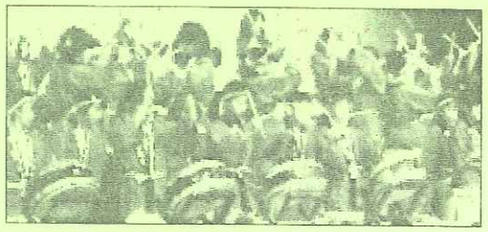
菅生中学校区地域教育会議ニューズレター　1998年3月5日

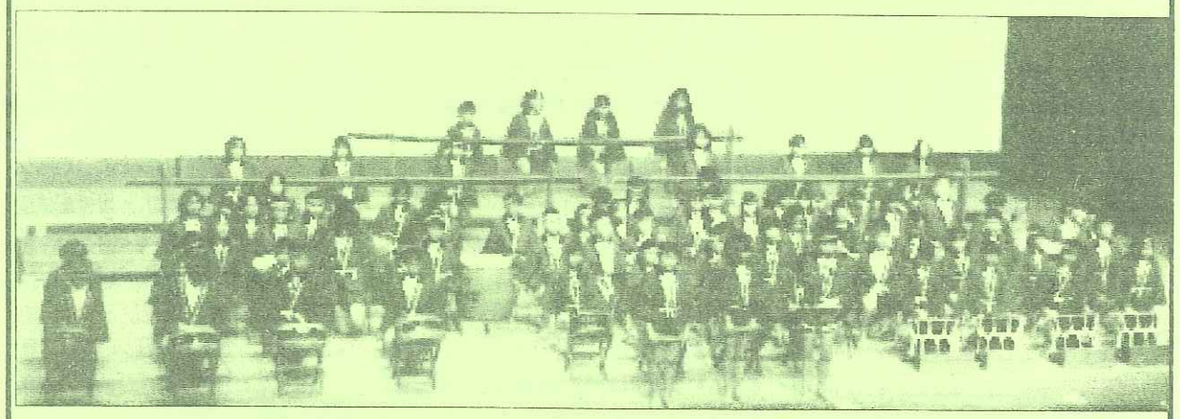
とらいあんぐる菅生 No 15

発行／菅生中学校区地域教育会議　編集／広報委員会　事務局／菅生中学校 ☎977-8787

心ひびかせて 稗原太鼓



稗原小のとりくみ



稗原小の子どもたちが演奏する和太鼓が人気をよんでいます。太鼓に慣れ親しむことをめざしたこの活動はスタートしてまだ１年。親子カーニバル、運動会などの行事や連合音楽会に参加しています。

2月28日に宮前市民館で行われた宮前区福祉大会のアトラクション部門でも、稗原小の5年生全員で、稗原小のオリジナル曲『稗原太鼓』を披露しました。

「大人も子どもも、みんなが安心して生活できるまちを守りたいです」という子どもたちの呼びかけの後、力強い太鼓が会場いっぱいに響きわたり、大きな拍手をもらいました。　（高木）

稗原小学校では、創立10周年の節目に、「子どもたちがばらばらでなく、心を合わせてできるものを」という願いをこめて、子どもたちの育ちに残る教育実践として和太鼓に取り組んできました。

まず、教員自身が和太鼓を習得しようと、音楽研究所から専門の講師を招き、姿勢、バチの持ち方から研修を始めました。平成6年度末より始め、7年度からは全学年の教育課程の中に位置づけています。4年生は専門の講師の指導も受けます。

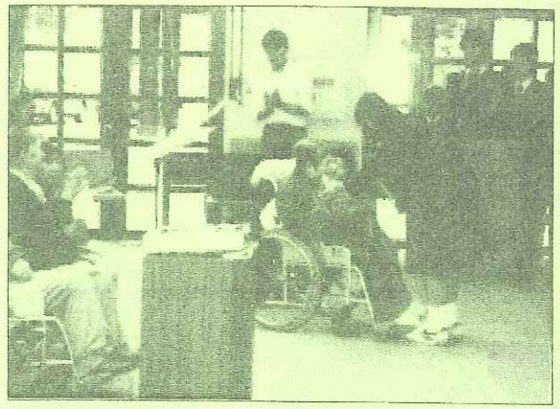
初めは、基本のリズムを組み合わた曲を打っていましたが、子どもたちと音楽部の教師で稗原小独自の曲『稗原太鼓』をつくりあげました。『稗原太鼓』の第1部と第2部は、4年生から3年生へと太鼓のたたき方が伝えられ、1年間の練習で子どもたちのものとなっていきます。5年生になると、洋楽器と和太鼓を使い、サンバのリズムを入れた稗原太鼓第3部を習得します。

（稗原小：野上美智子）

老人ホーム訪問

楽しんでいます

菅生中の生徒が長沢の荘寿の里（特別養護老人ホーム）を毎年訪問、今年度で５回目になります。担当の鹿島順子先生に聞きました。



93年（平成5）当時、菅生中の卒業生が職員として勤務していた荘寿の里から「菅生中の生徒に遊びにきてほしい」という要望がきっかけで始まりました。厚生委員会が主催で、生徒会役員や図書、放送、広報などの委員会や一般から希望の生徒たちがこの企画に参加しています。

今年度は約90名が参加、軽音楽やゲーム、影絵、合唱、合奏を行いました。参加した生徒の表情は明るく、学校の授業では見つけられなかった生徒のよい面がたくさんありました。何かをしてあげるというのではなく、共に楽しんでいます。歌がうまく歌えて良かったと素直に喜ぶ子もいます。

お年寄りの表情もとてもいいですね。音楽に合わせて体を動かす女性の方や、ゲームを楽しむ男性の方が印象的でした。

ボランティアというと、成績の評価の対象になるとか内申点が上がると思って、うわべだけで参加を希望する生徒もいるもしれませんが、本番の生徒の活躍を見ればそんな子はいないということがよく分かります。これからも、生徒と一緒に楽しい内容を考えていきたいと思います。

(談)

トライアングル ニュース

■菅生こども文化センター

☎976-0444

★土の笛をつくってみよう! パートⅠ

3月7日 (土) 午後2時～5時

講師: 武蔵野女子大教授　浜本　昌宏

★くんせいづくりに挑戦

3月14日 (土) 午前11時～午後4時

★土の笛をつくってみよう! パートⅡ

3月18日 (水) 午後2時～5時

■蔵敷こども文化センター

☎977-2577

★人形劇「クレヨンカンパニー」がきます

3月28日 (土) 午後3時～4時30分

がらくた人形劇『おおきなかぶ』『ペンギンくんそらをとぶ』

無料※整理券（100名）

を発行しています。お早めに！

■宮前市民館菅生分館

☎977-4781

★春の成人学校「暮らしの絵手紙入門」

5月9日～7月4日(毎土曜全8回)

午後1時30分～3時30分

だれでも描ける絵手紙で、暮らしを楽しく変えてみませんか。

季節や日常の小さな感動をそのままハガキの世界に収めます。

定員 30 名　受講料 4000 円　教材費　1500円

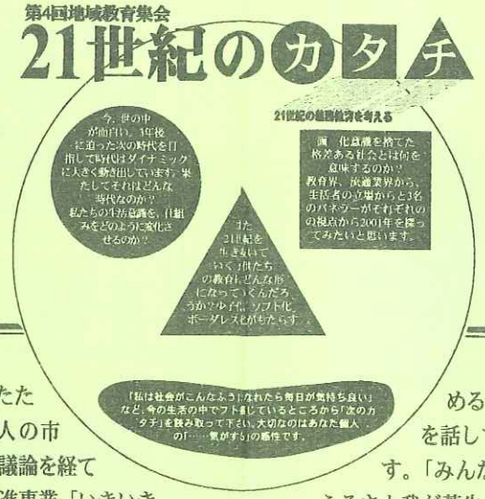
〈申込み〉4月25日 (土)10時より分館で

編集・発行……菅生中学校区地域教育会議
広報委員会
事務局……菅生中学校　977-8787
取材……髙木／中島／七浦／生駒
構成、編集……生駒
アドバイザー…工藤

第4回地域教育集会

21世紀のカタチ

去る、1月31日（土）菅生分館で「21世紀のカタチ」～21世紀の義務教育はどうなるか？～のシンポジウムが行われました。パネラーには、教育界からは教師の現場からまた行政指導の立場から戦前戦後の教育を一貫して研究提言されてきて現在、川崎市教育委員会委員長の布川氏の基調講演。現在文部省もやっと本気になって真の意味の教育改革をやるつもりでいる。だから、皆さんが常に意識改革を強く持ちつづけなければならない。…という話をかわきりに、スーパーマーケットを経営しながら地域とのコミュニティー、ボランティア活動を通して見えてくるモノは、自然の大切さと人間のいきいきした表情に未来のあり方を強く感じると言う松井隆一さん。そして住民でありPTA会員の立場から現在の義務教育が抱えるの問題点指摘と21世紀への警告。それぞれの立場から率直に21世紀を語ってもらいました。また会場には菅生中学校区、菅生小学校区、稗原小学校区からの87名の参加者が集い、パネラーとの活発な意見も交換されました。



「21世紀のカタチとは何か？」丸・三角・四角。それぞれの価値観で自分らしい生き方を自分の責任で表現できる時代になるのではないか？そんな個性が調和していろいろな価値観が共存、共鳴した楽しめる人生、生きがいのある社会。そんな時代が見えたシンポジウムでした。

（コーディネーター／工藤文比古）

●主催／生涯学習委員会　共催／川崎市青少年の健全な育成環境推進委員会

子供は元気か 先生は元気か そして 親は元気か

布川光明氏（川崎市教育委員会委員長）

「子供に飽くと申す人には花もなし」

これは、約300年もの前に私の尊敬する松尾芭蕉の俳句です。子供が嫌になった人には花もない。

21世紀を語るにはやはり20世紀をしっかり踏まえてみる必要があると思います。実は私の母は明治33年、1900年生まれです。ちょうど20世紀が始まった時代を母を通じて学んだ訳です。そして私が小学校5年生のとき疎開先で終戦を迎えました。1945年のことです。そんな訳で20世紀初頭は母から、中盤は青年期に、後半は教職員・行政人として現在に至るまでおおむね100年教育界を見つめつづけ体験してきた訳です。軍国主事教育から平和と民主主義と180度大きく激変した昭和20年が第1次改革期なら、昭和59年に中曽根内閣での戦後の総決算ということで臨時教育審議会の発足で戦後の教育が大きく変化したのが第2次改革期です。そして1992年21世紀に向かって小学校の「教育改革」が始まりました。子どもの成績の評価基準が相対評価から絶対評価になりました。通知表も根本的に改善されました。また「学校週五日制」の第1歩がスタートしました。学制120年にして画期的なことでした。第3次改革期です。

「新しい酒は新しい革袋に」

校長自身が180度変わらなければ教育が変わらないのではないか？先生自身が180度変わらなければ子どもの教育も変わらないのではないのか？それほど教育の内容を大きく変えようとする計画でした。

「21世紀の教育のカタチは」どうなるのか？先週、各都道府県、指定都市、教育委員会で来年度の文教予算の説明が行われた時、文部省の21世紀初頭の教育はどうなるのか、いつまでにどんなことをするのかの計画が出されたものです。

5つの大きな柱をたてています。

1.豊かな人間性の育成と教育制度の革新
2.社会の要請の変化への機敏な対応
3.学校外の社会との積極的な連携
4.留学生交流等の国際化の推進
5.教育改革の輪を広げるための経済界等との協議の場などの設定

私は国がこういうことを言い出すのを見て大きく変わったな…と言う実感を覚えています。いままでは、中央集権化して地方を先生をギリギリ縛ってきました。それに対して縛られてたまるものか…と努力してきたのが川崎市教育会だと思います。文部省に何を言われても教育委員会も我々教員もストレートに川崎の心で、川崎の子どもの心で考えるという姿勢は、教員も行政も一貫しているのが川崎市の姿勢だったと思います。子どもがあって、学校があって、教育委員会があって、国がある。

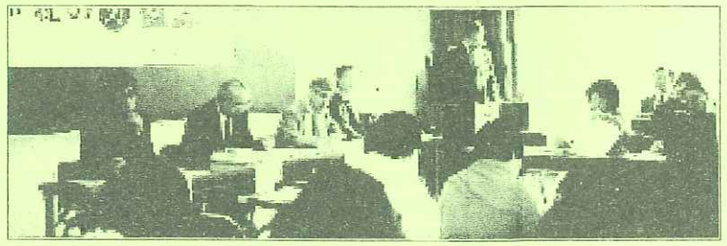
従って学校の先生方にどんな教育をするべきか任せる。それを応援して支援するのが文部省である…と。川崎でいえば学校と教育委員会は上下関係ではなく対等のパートナーになることです。こんな意識改革が今、行われています。今年、1998年は新しい半世紀を踏みだす年です。50年経ってやっと地方自治法も国と対等で協力しあう関係に踏み出す時がきました。一方川崎市では「草の根からの発想」ということで、伊藤三朗前市長が2年間構想をあたため124ヶ所で2万人の市民、専門家などと議論を経て出した川崎教育推進事業「いきいきとした川崎の教育をめざして」を1986年に打ち出しました。それと1993年には「生涯学習推進基本計画」と「川崎新時代2010プラン」。この3つが川崎教育の原点です。文部省が打ち出した5つの柱の21世紀の教育プランと川崎の教育の原点である3つのプラントをどう重ね合わせて進めていくかを、私は今考えているところです。

私達は川崎における学校、家庭、行政での地域ネットワーキングの実現をめざして「子どもは元気か、先生は元気か、そして親は元気か」をスローガンに明日を見つめて、キリリと分別して「21世紀の教育」に挑戦する勇気が望まれます。

表情が気になります いい表情が見たい

松井隆一氏（スーパー経営者）

私はこの横でスーパーマーケットをやっています。地域活動での街づくりを長いことやってきた中からいろんなことを感じることができます。大勢の人たちと共感して進める喜びみたいなことを話してみたいと思います。「みんなで創ろう歴史のふるさと我が菅生」これは今から20年前に菅生青年同志会がおこしたスローガンです。私のスーパーマーケットは約30年前に八百屋からスタートした訳ですが、毎日たいへん大勢のお客さんと接してきて、そんな昔からのお客さんの表情が気になります。イキイキとした表情の人、ちょっと困りごとでも有るんではないかと思える人。皆さん良くご存じの成田真由実さんのスキーの指導をしたことがあります。彼女は下半身の筋肉が全く使えないのでチェアスキーを使い4人くらいのボランティアが支えながらスキーを始めました。ところが4日めぐらいになると中級者コースをすいすいと滑ってる。体が自由に動けないハンディーの子がチェアスキーで風を切る経験というのは彼らにとって凄く大きな喜びなんですね。そのときの表情が素晴らしくイイんです。そして、ハンディーの人たちと一緒にサポートするボランティアの人たちも大変楽しく表情が明るくなってきます。子どもにとっても、自然の中で遊ばせるとイイかたちで育っていくんだなと感じました。この川崎も自然が大変多いところです。人間と自然のかかわりを考えてみますと、人類が出現して500万年と聞いていますが、果たしてそれがどのくらいの長さかが良く分からないですね。1mmを10年とすると1cmが100年になります。実際この宮前あたりでは2万年位前には人が住んでいたと聞きます。2万年は2m。人類の歴史の500万年は500m。人間の一生が1cmですから500mの中の1cm。霊長類は5000万年で5000m。さて地球の歴史が45億年で450km、だいたい東京と大阪ぐらいの距離ですか。そんな中でのたった1cm。そんなことを考えるとなぜ我々は産まれたか？この宇宙の歴史の中でこの地球に産まれたことがほんとに奇跡だと思えます。よく産まれたなと思います。人類の5kmの中の1cmのチャンスをよく私たちは持てたと思う。これは素晴らしいことだと思います。こんなことを子どもたちに理解してもらって、そして人間も自然界の中でズーッと動物として生きてきたのですから、この自然の中からもらう感性はいっぱいある訳なんです。地球の中では自然環境とか歴史とかを問題に入れながら子供達に育ってもらいたいと大勢の仲間と思っています。



未来の扉を 子どもたちと 一緒に たたきたい

奥崎　隆氏（菅生中学PTA会員）

菅生小学校の成人委員会の副委員長時代の1年間でいろいろなシンポジウムをやった中で、「子どもを取り巻く状況、学校を取り巻く状況に、否定的な現象が目立っている。子どもが先に悪くなる社会などない。子どもは社会の鏡と言われている。社会の病理が子どもの心を蝕んでおり、この克服が求めれれるという指摘や教師の仕事が増えており月2回の週5日制において充実した教育をやるために追いつかない現状がある。フランスみたいに25人学級編成の導入も必要でないか？また、足し算引き算などのテストでも100点がとれる。しかし、文章題がとけない。「たす、ひく、かける、わる」の意味を低学年できちっと教えることが大切。要するに、当たり前のことをきちっと身につけさせることが重要ではないか。しかし、これらのいろんな問題を、一保護者として発言することはとても勇気のいることなんです。ちょっと言葉としては的確ではないかも知れませんが言ってみれば、人質を学校に出しているようなもんですから。たとえ発言しても担任止まりでなかなか本題にまで進まなかったり…。そこで私は「宮前タウン情報」というホームページを開設して自ら情報を発信したり会員からの情報を公開したりして地域のネットワークづくりをしています。自ら発信する情報基地です。21世紀は突然やってくるわけではなく今日の延長としてそれが存在する訳でやはり現状をしっかり把握しなくてはいけません。それには、子どもの状況をリアルに捉える必要があるのではないでしょうか？今私達の目の前にある問題、環境問題、高齢化問題、子どもの非行化問題、これら大人が創ってきた現在の社会の病理に立ち向かい「社会そのものを創っていく」ことが重要です。21世紀は誰のものか？それは今の子どもたちが主人公になります。病んでいる社会をどう無くすかを考えないといけない。特に小中学の義務教育は地域と一体になった教育が必要だと思っています。そんな地域の住民として、PTA会員として地域のコミュニケーションを通じながら、自分自身のあり方をさがしたいと思っています。そして、次の時代の主人公である子どもたちと一緒に21世紀の扉をたたきたいと思っています。

第4回地域教育集会 21世紀のカタチ

工藤／
それではここで1つ問題提起をさせていただき、それを糸口に会場の皆さんからも意見などをいただきたいと思います。
まず先ほど布川さんから「校長および先生が180度変わらなければ教育も子どもも変わらない」との指摘がありましたが、実際に学校を見ていると私は、とても180度変えられるようには思えない。具体的にどんなことをしていますか？

今、世の中が面白い。3年後に迫った次の時代を目指して時代はダイナミックに大きく動き出しています。果たしてそれはどんな時代なのか？私たちの生活意識を、仕組みをどのように変化させるのか？

まず、先生が元気でないといけない

布川／
教育も学校教育から生涯教育へと大きく変わっている中で、「川崎新時代2010プラン」の中でのスローガン「子供は元気か？先生は元気か？そして親は元気か？」とあるように先生がもっと社会勉強をして元気でないといけない。ということで各学校に100万円ほどの研究、研修費を自由に使ってくださいと…出しています。また、学校が少しでもよくなっていくためには地域からも多いに意見を取り入れて行く必要があるため、地域教育会議を数年前につくりました。これらも180度変わるための現れです。そんな訳で現在先生方も行政側も、地域の人たちの協力を借りながら一生懸命改善しているところです。

工藤／
では、その研修費の使い方はどのように活用しているのですか？

菅生中学・吉原／
これは研究研修費といいまして、約71万円です。菅生中ではなるべく多くの先生に活用してもらっています。26人中23人もの先生が使わせていただきました。私は黒部を視察してきました。その結果は市の方に報告しています。

菅生小学校・安部／
1人2万円くらいの予算で個々に自分で計画を立てて研修しています。私は歴史が好きなので地方の遺跡を見てきました。その結果を報告するという形で利用させていただいています。

稗原小学校・野上／
研究研修予算委員会をつくり、委員会で予算の分担をしています。稗原小の場合は学校にいろんな人を呼んでセミナーを行っています。昨年は3人の講師を呼びました。その講師代などに当てています。また先進モデル校の訪問見学なども行っています。

愛をしっかり教えることが大事

菅生・矢沢／
いろいろな方のご意見を聞いていてやはり、親の責任、地域の責任、学校の責任、それぞれの責任をしっかり持つことが大事だと思っています。そんな中で「愛の教育」があまりにも欠けているのではないでしょうか？どんな時代でも親は自分の子どもを責任をもって育て世に送りだしてきました。そんな中で一貫して変わらないのは「愛」だと思うんです。ですから、子どもたちに目標を持つことを教え、愛をしっかり教えることが大事ではないか。

偏差値の高い学校へ皆が行くのが問題

菅生・生駒／
親も学校も社会も「子どもには少しでもいい学校へ行かせたい」というのが大きな問題。そういった画一的な価値観が子どもを硬直させて追い込んでいる。この問題を解決しないかぎり21世紀の教育は出てこないのではないか

なぜ塾に行かせるのかよく考えて

稗原・武石／私の友人で塾をやっている人がいます。その旦那さんが東大出の超エリートサラリーマンなんですが、その奥さんは自分の子どもには決して塾には行かせないといっているんです。なぜかというと塾で育った今の自分の旦那がすごくみすぼらしいから、そんな人間になって欲しくないといった、ちょっと矛盾しいるんですが。
なぜ塾に自分の子どもをいかせたいのかを考えてほしい。先生方にぜひお願いしたいのですが、先生は自分の職業を選んで、毎日それをやっているわけですがそれを単に職業としているのか。または楽しんでやっているのか？つまりイメージの問題ですよね。「将来は自分の好きなことで収入を得られればいい」という発想力は必要だ。勉強も大切ですが、それよりも子供たちが社会に出てどんなイメージで職業に就くか？の手助けになるような先生の体験などを話してほしい。

また21世紀を生き抜いていく子供たちの教育はどんな形になっていくんだろうか？少子化、ソフト化ボーダレス化がもたらす

裏へ続く

教育ビッグバンはすぐそこまで来ている

布川／
朝日新聞に連載されている平成30年という小説の中にオフィスのない会社だとか、家族がいない家庭というのが出てきます。新技術の通信やテクノロジーがそういった形態を可能にしているだろうという近未来の話です。金融の世界では規制をどんどん外して起こる金融ビックバンが進行しています。教育ビックバンも始まりつつあります。規制緩和が無くなって、親が学校を選べることになれば、下手をすれば学校の序列化が始まるかもしれない。激しい受験戦争が始まるかもしれません。よく覚悟の時代なんていわれています。教育の自由化はスグそこまで来ています。
1人1人がしっかりしないと、規制緩和が私たちを苦しめることになりかねません。そういった意味でこういったところでいろいろな議論を活発にしていくことが大事です。

いつまで学校に責任を押し付けるのか

稗原・十文字／
昨年秋、菅生神社でのお祭りの演劇で、それはそれは見事にある役を演じた子を見ていて私は涙が止まらなかったのです。というのはその子を小さいときからよく知っていて中学生の時なんかは勉強はできないし、字もろくに書けない、教室は飛びだすはで、それこそ学校のお荷物だったんです。それが昨年28才になって、地域のかかわりの中での演劇で見事に才能を開かせたんです。それ以来彼はしっかり自信を持つことができました。ですから自分の子どもの可能性を勉強ができないからダメなのではない。人間どこでどうなるか本当にわからないものだということをぜひ知ってもらいたい。それと、先日、教師が生徒に殺されるという事件がありました。授業に遅れてくることは悪いことだ。損をするのは自分だということくらい中学生になれば十分理解できるはずです。だとすれば、それを教師があえてしつこく注意することはなかったのではないか？教室を飛びだす生徒は、ちょっと勇気がいりますが飛び出させておけばいい。あるいは親に電話して「後は親が責任をもって」と学校は言ってはいけないのでしょうか？学校はそこまで責任を持たなくてはいけないのでしょうか？

愛に責任を持って

犬蔵・坂大／
先ほど「愛の教育」ということが出ましたが私は学童をやってますが、今の若いお母さんがたを見ていて本気で愛の教育をしているんだろうか？と疑問を感じています。うわっつらで言うと「自分の子どもに愛していない親がどこにいる」といいますが、愛してはいるけれど、責任のあるところは他に持っていくというのが大体です。自分の子どもがスポットライトつまりヒーローになるのは親も望むところですが、その裏に必要な地道なところはみんな嫌がる。表も裏も2人3脚でやっていくのが本当の「愛の教育」ではないか。

**画一化意識を捨てた格差ある社会とは何を意味するのか？
教育界、流通業界から、生活者の立場からと3名のパネラーがそれぞれの視点から2001年を探ってみたいと思います。**

工藤／
最後に今日、出席いただいたパネラーの方々に感想をひと言ずついただいて、まとめとしたいと思います。

布川／
大変感激いたしました。このような議論がますます広がり川崎の学校、教育に反映することを期待します。

松井／
来る2月22日に平瀬川で第2回桜の植樹祭があります。自然を見つめれば見つめるほどいろいろなことがわかってきて楽しい気分になれます。先ほどから議論されている教育の問題は大変重要かもしれませんが、結局は生活する場が楽しいというのがすごく重要な条件だと思う。

奥崎／
子供たちが自分で決めていくというルールづくりが必要。いろいろと頑張って挑戦している若い人たちがいます。彼らを信頼すれば大きな可能性を持っているということを信じてやっていきたい。

「私は社会がこんなふうになれたら毎日が気持ち良い」など、今の生活の中でフト感じているところから「次のカタチ」を読み取って下さい。大切なのはあなた個人の「……気がする」の感性です。

「21世紀のカタチ」をまとめたものですが、紙面の関係上すべてのご意見をご紹介できなかったことをご了承ください。